

主 題：幸福に降服する  
 聖書箇所：マタイの福音書 5章3節

私たちが自分の生涯に幸せをもたらすものはいったい何なのかと考えるとき、また、私はこれによって幸せになることができるということ、それを確認したい、どのようにして確認できるのかと考えたとき、それは私たちがこれによって幸せになると考えるものを失ったときではないでしょうか？愛する家族の病気、また、家族が亡くなったとき、大切なものを失ったとき、貯金が無くなったとき、自分もっていた地位や権威が奪われたとき、人は私は不幸になったと言います。幸せだと思っていたものを失ったからです。人間の歴史を見たとき、人々は常にいったいどうすれば幸せになれるのかと考え続けてきたと言っても良いでしょう。この世界のすべては幸福を得るために一生懸命努力をし続けて来ました。けれど残念ながら、恒久的な幸福というものを多くの人は見つけることなく、人生を過ごして来たのです。こうすれば幸せになれる、これこれをすればあなたは幸せを掴むことができる、そのようなことばをいろいろな雑誌や本の中に目にし、また、テレビの番組の中でも私たちは耳にします。人々は常に、いったいどうすれば本当に幸せになることができるのか、いったいどうすれば幸せを維持し続けることができるのか、それを探し求め続けています。

今日からこのことをいっしょに考えて行きたいと思います。もし、この地上でこれまでに語られたメッセージの中で、最もすばらしいメッセージのリストがあったとするなら、人間の歴史の中で、聖書の教えに関するすばらしいメッセージのリストがあったなら、多分そのベスト5に、イエス・キリストがマタイ5章で語られた山上の説教が含まれているのではないかと思います。このメッセージの冒頭に、いわば序文として、非常にすばらしい、同時に非常に力強い、私たちに責めることばが記されています。そこでイエスが問題にされていること、語られていることは、私たちの幸福に関することです。この部分はいろいろな呼び方がされています。「至福の教え」とかその数をとって「八福の教え」であるとか、そのように呼ばれているこのマタイ5：3-12をこれからごいっしょに学んで行きましょう。

この至福の教えとして知られている部分は、キリスト教の歴史の中でも、多分多くの人たちが心から愛し、暗証し、何度も繰り返して読み、思い巡らした箇所ではないかと思います。なぜなら、ここに書かれていることばは私たちに勇気を与え、慰めを与え、希望を与えることばだからです。けれども、私がこの山上の説教を学んで行くほどに強く感じることは、イエスが語られているひとつひとつのことばが、私たちの心を喜ばせる甘美なことばであるだけでなく、それ以上に、私たちがもっている人生観、私たちがもっているクリスチャンとしてのあり方、特にその特徴に関して非常に大きなチャレンジ、また、戒めを与えていると思うのです。この中でイエスは、天の御国に属する者の特徴について、私たちに大切なことを教えています。

今日は5：3は見ません。今日は、この至福の教えを私たちが正しく理解して行くために必要な事柄、特にその文脈、背景を考えて行きます。イエスがここで語られていることはいったいどういうことなのかをよりよく理解するために、細かいところを見る前に、大きな写真を見なければいけません。それゆえに、今日は全体を見て行きます。三つのこと、(1) イエスがなぜこの山上の説教を語られたのか、(2) この至福の教えと言われる5：3-12が教えている焦点とは何か、(3) なぜこの箇所を学ぶことが今この時代に生きるクリスチャンにどのような重要性があるのか、を学んで行きましょう。私たちがこのことをしっかり理解することができるなら、イエスが語られるこの至福の教えのひとつひとつをより深い理解をもって知り、そして、私たち自身が変わって行くことができると思います。そのための助けができればなによりも幸いです。

### 1. なぜイエスはこのメッセージを語られたのか

一本一本の木の枝を調べる前にその木がどんな森の中に植わっているのかを知ることが大切です。それは私たちがみことばをしっかりと理解して行く上でも必要なことです。私たちは全体がよく分かっていると、その細かい一つ一つの部分をどれほど詳しく調べても、本来言われていることと関係ないことを導き出してしまいう可能性があるからです。ゆえに、特にこの至福の教えを見て行くに当たって、私たちはその全体像を見て行きたいのです。今から2000年前のガリラヤの山の中にお連れしましょう。

#### ○イエスはいつこのメッセージを語られたのでしょうか？

イエスの生涯の特に公生涯といわれる、バプテスマを受けられてから昇天されるまでの約3年半は大きく二つの時期に分けることができます。前半の2年半は公的宣言の時期ということが出来ます。この時期にイエスは群集を求めて、町々を回られました。そこでイエスはたくさんの奇蹟を行ない、いろい

ろなところで人々に教えをされました。イエスの活動の最初の2年半です。けれども、ある時期を境にイエスはそれまでと全く反対のことをするようになります。最後の1年間は個人的訓練の時期と言えるのではないかと思います。はじめの2年半は公的宣言の時期、後の1年は個人的訓練の時期です。イエスはこの後の時期は群集を避けて歩かれました。イエスは奇蹟を行なうことを拒みました。イエスはご自身をイエスに付いて行こうとする群集から引き離して、多くの時間を特に12人の弟子たちとともに、彼らを訓練し彼らを教えるために過ごされました。聖書を読んで行くとき不思議に思ったことはないでしょうか？イエスが奇蹟をしいやした人たちに「このことを告げなさい」と言いますが、別のところでは「黙っていなさい」と言われたこと、その理由はここに 있습니다。告げなさいと言ったのは、最初の2年半にその奇蹟が行なわれたのです。イエスは群集にそのことを知ってほしかったのです。メシヤがやって来て、神のわざがなされて、神の王国を告げ知らせる、そのときが来たのだと人々に教える時期に、イエスはいやしを行ない、町々に行って人々に宣言しなさいと言われたのです。ところが、イスラエルの人たちはそのメシヤを拒んだことが、ヨハネの福音書6章やマタイの福音書12章に書かれていますが、その後はイエスはできる限り群衆から身を避けるようになったのです。ですから、奇蹟を行なっても、わたしがここにいることを告げてほしくないから、黙っていなさいと言われたのです。

山上の説教はこのどちらの時期に属しているのでしょうか？それは最初の2年半の時期に属しています。この山上の説教が記されているマタイ5章から7章、また、ルカ6章にも同じ記事が記されていますが、それは、イエスの人気が最も高かった頃です。イエスはガリラヤ地方で約18ヶ月、伝道の働きをされました。その18ヶ月の中でイエスはこの山上の説教を語られたのです。具体的にこの時にということはありませんが、私たちが福音書を比べて見て行くとき、どのようなことがこの山上の説教を語るに当たって、また、その内容に関して影響を与えてきたのかを知ることができます。特に、いくつかの非常に重要なイベントがここで起こっていたのです。たとえば、イエスがこの山上の説教を話される前に、イエスは多くの奇蹟、特にいやしを行なわれていました。それゆえに、多くの群集がイエスの周りにいたのです。人々はあらゆる地方からイエスを求めてやって来ました。イエスはその人たちをことごとくいやされました。また、イエスは山上の説教を語られる前に、ヨハネ5章に記されているように、仮庵の祭りがあってイエスはエルサレムに行かれます。そこで、イエスは「わたしは神です」と語られたのです。大胆にご自身がいったいどれであるのかをユダヤ人のリーダーたちの前で話すのですが、彼らはそれを受け入れません。むしろ殺したいと願ったのです。また、そのユダヤ人のリーダーたちとの間で安息日を巡って大きな議論がなされました。それはいろいろなところで何度もありました。安息日にイエスが人をいやしたりされたから、ユダヤ人のリーダーたちはなぜそのようなことをするのかと、もめごとが起こったのです。これらの出来事はすべて、この山上の説教の内容に大きな影響を与えるものとなったのです。

#### ○どのような年代でしょう？

この山上の説教の詳細はマタイの福音書が私たちに教えるのですが、年代的にどのような時期に起こったのかと考えるとき、マタイの福音書は余り役に立たないことが分かります。マタイは福音書を年代順に記していないからです。トピック順に、彼が言いたかったことを順に並べて構成しているからです。それでルカの福音書を見ます。ルカは歴史家でもあったので、その詳細を時間を追って記しています。ルカの福音書を見ると非常に興味深いことが記されているのが分かります。マタイとルカの二つの福音書を並べて見て行く時、イエスがこのメッセージを語るに当たってどのようなことをされたのかを知ることができます。ルカはこの山上の説教が語られる前に、イエスがユダヤ人のリーダーたちと安息日を巡っての口論がされていたことを記しています。その後、ルカ6：12を見ると「**このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。**」とあり、イエスは安息日についての口論があった後、一人山に登って行って一晩祈られたのです。そして、明け方になってイエスは弟子たちを呼びます。そこで12人の弟子たちを任命します。そのことが6：13-16に書かれています。そして、弟子たちを任命した後、イエスは弟子たちといっしょに山から下りて来られました。すると、そこに非常に多くの人々が至る所からやって来ました。イエスはその人たちをいやされたと記されています。マタイ4：25を見ると「**こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスにつき従った。**」と、その群集がだれであったのかということが記されています。このような群集をいやしておられたイエスは、彼らを見てもう一度山に登られたのでしょうか。そこでお座りになってこのメッセージを始めた5章で記しています。

#### ○だれに対して語られたのか？

ではイエスはいったいこのメッセージをだれに対して語られたのでしょうか？私たちが余り深く考えないでこのメッセージを理解しようとするなら、この質問に対して多分群集に対して語ったと答えることでしょうか。けれども、しっかりみことばを見て行くなら、このメッセージの対象は群集ではなかったこ

とに気付きます。イエスはマタイの福音書によると、この群集を見て山に登って行き座ってお話しになることが記されているのですが、5：1にある群集は4：25の群集のことです。けれども、マタイはイエスが山に登って座ったときに、弟子たちが来たことと記しています。みことばを理解する上でしてはいけないことというのは、現代の状況をイエスの時代に置き換えることです。今、私たちは大きな声を出さなくても後ろの方まで声が届くのは、マイクを使いスピーカーがあるからです。この時、多分何百、何千という群集がいたのでしょうか？群衆の皆が聞き取ることは不可能です。イエスは弟子たちに向かって話されたのでしょうか？群衆の皆が聞き取ることは不可能です。イエスは弟子たちに向かって話されたこととマタイは記しています。この当時、大勢の前で教えられるときは、近くに居る人に教師がメッセージをし、それがまるで伝言ゲームのように後ろへと伝わって行くのです。聞いた人が次のグループへ伝えて行くのです。そのようにして多くの人たちがそのことばに耳を傾けて聞こうとしました。そのように訓練されていたし、その過程がもう出来上がっていたので、人々は教師が語ったメッセージの内容をしっかりと聞くことができていたのです。多分ここで起こった状況もそのようでしょう。でも、イエスが明らかに語った相手というのはだれでしょう？5：2に「**そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。**」とありますが、この「**彼ら**」というのはだれのことでしょう？それは群集ではなくて弟子たちを指しているのです。イエスは弟子たちに対してこのメッセージをされたのです。この「弟子」ということばは、確かに「学ぶ者」という意味がありますが、思い出してください、この山上の説教が起こる前に何があったのでしょうか？ルカの福音書で教えられていたように、イエスは12人の弟子たちをここで初めて選出されたのです。多分もっと多くの弟子たちがそこにいたでしょう。その中から12人を選んだのです。それは非常に大きなイベントでした。そして、その弟子たちに向かってこの山上の説教が語られるのです。12人だけに対して語られたのか、多分そうではないでしょう。周りにいた弟子たちにも、また、群集もイエスが語られることに耳を傾けようとしていたことは明らかです。7章の最後を見ると「**群衆はその教えに驚いた。…権威ある者のように教えられた**」とあるからです。けれども、このメッセージはだれに語られたのかと考えたとき、イエスは特に12弟子に向かって語られたと言えるのです。○何を語られたのか？

では、イエスはいったい12弟子に何を語られたのでしょうか？皆さんはそれが私とどのような関係があるのかと思われるかもしれませんが、個人的に大きな関係があると断言したいのです。この山上の説教はご自身の弟子たちに向かって、これからこのメッセージを携えてガリラヤ地方に出て行こうとしている、また、その後、全世界に出て行こうとしている弟子たちに対して、あなたたちは何をどのように話さなければならないのかということをお教える、非常に大切なメッセージだったのです。パークレーという神学者はそのことをこのように説明します。「**山上の垂訓とはイエスが選ばれた弟子たちに対して、その教えの中心点、本質、真髄を示されたものだ**」と。このメッセージを要約するならどのようなことばでまとめることができるでしょうか？マルコ1：15でイエスはこのように言われています。「**時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。**」。イエスのメッセージは神の国がやって来たというものです。イエスがその国の王だからです。ですから、あなたたちは悔い改めてわたしの語るメッセージを信じなさいと語るのです。この山上の説教はイエスの弟子たちに対して、イエスがこの王国に関する事柄を教えるメッセージなのです。弟子たちがこの王国に属する者としてどんな生き方をしなければいけないのか、それを明らかにするメッセージだったのです。

このメッセージはアウトラインとして五つに分けることができます。(1) 5章3-12節、王国に属する人の特徴、(2) 13-16節、王国に属する者の責任、(3) 17-20節、王国と律法の関係、(4) 21節-7章6節、王国に属する者たちとユダヤ人のリーダーたちとの違いを対比、(5) 7章6-28節、王国の原則をどのように適用するべきか。イエスはこのメッセージを通して、弟子たちにいったいどのような特徴をもたなければいけないのかを教え、いったいどんな責任が彼らにあるのかということをお明確にされ、そして、すでに啓示されていたみことばとどのような関係をもって生きなければいけないのかを教え、人々にどのようなことを伝えて行かなければいけないのかということをお教えられたのです。ある人たちは、この山上の説教は今生きる私たちには関係のないものだと言います。これはユダヤ人に約束された王国に関する教えだから、クリスチャンである私たちには関係がないのだと、そのような考え方をする神学者たちもいます。けれども、私たちがこのメッセージを正しい文脈の中におき、そこで語られている内容をしっかりと吟味するならば、私たちは今の私たちにふさわしいメッセージであることを知ることができます。なぜなら、私たちもこの王国に属する者だからです。確かに、イエスはこのメッセージをユダヤ人たちに語りました。ユダヤ人に約束された王国に関する事柄として語られました。それは間違いのない事実です。けれども、私たちもイエス・キリストの働きによって、そのすばらしいみわざによって、この王国に入れられた者、神の御国に属する者です。また、私たちに与えられている使命は、出て行って伝えなさい、わたしが教えたすべてのことを教えなさいです。そこ

から、山上の説教を除いてもいいのでしょうか？そんなことはありません。このメッセージは私たちが王国に属する者として、イエス・キリストによって救われたがゆえに、天に国籍をもつ者として、どのような特徴をもち、どのような責任があり、どのようにみことばを捉え、どのように実際に生活をし、どのように人々にこのメッセージを伝えて行かなければいけないのかを教える、非常に大切なメッセージなのです。だから私たちはこれを学ばなければいけないのです。歴史的な文脈、また、このみことばを通しての文脈を考えたとき、私たちはこのメッセージの重要性を知ることができます。そして、この至福の教えと言われるこのメッセージの序文は、私たちが知らなければいけないこの山上の説教という大切なメッセージが、どのような展開をして行くのかを示すのです。

## 2. この至福の教えを通してイエスは何を教えたかったのか

この至福の教えの中で私たちが最も印象深く思うのは「幸いなるかな」（文語訳）ということばではないでしょうか。この「幸いなるかな」という宣言が、この至福の教えの最も重要な点ではないかと思えます。事実、このことばだけが八つあるこの至福のことばに繰り返されています。イエスはこの山上の説教を始めるに当たって、「幸いである」という宣言をもって王国に属する者たちの特徴がどのようなものであるかを私たちに教えるのです。3-12節にイエスは八つの宣言をします。それらすべてが「幸い」という宣告を受けた人々の特徴を表わしているのです。イエスがここで強調されたことを正しく理解するためには、私たちはイエスが言われる「幸い」という意味が何なのかをしっかりと理解しなければ、全体を正しく理解することはできません。この「幸いなるかな」ということばは、ギリシャ語の聖書でも同じように最初に出て来ます。つまり、このことばが強調されているのです。

幸い、しあわせ、もう少し直訳するなら祝福ということばを、イエスはどんな意味で使っているのでしょうか？それをはっきり理解しなければいけません。私たちが今、幸い、幸福ということばを聞くとどんなことを思い浮かべるでしょう？辞書では、「幸い」ということばは「運がよく恵まれた状態にあること」とあり、「幸福」ということばは「恵まれた状態にあつて満足に楽しく感じること」で、皆さんが思い浮かべる「幸い」はこのような定義でしょうか？私たちは確かに、私たちが生きている様々な状況、状態に基づいて、「私は幸せである」とか「私は幸せでない」という判断をしようとします。私たちがその中でもたらされる満足感や幸福感によって決めようとします。つまり、私が幸せだと感じる状況に運よくいることができるなら、私は幸せなのです。残念ながら、そのような状況にないとき、私は満足感も幸福感も抱くことができないから、私は幸せでないという判断をします。けれども、イエスがここで語られている幸せというのは、私たちが今定義したような、また、辞書が定義しているような幸せではありません。では、イエスが言われる幸せ、祝福とはどんなことでしょうか？

(1) 神がもっておられる幸い：「幸い」ということばは聖書を見て行くと、神ご自身に使われています。たとえばダビデは、詩篇68：35で「**神よ。あなたはご自身の聖なる所におられ、恐れられる方です。イスラエルの神こそ力と勢いとを御民にお与えになる方です。ほむべきかな。神。**」と言い、この「**ほむべきかな**」ということばが「幸いなるかな」なのです。何とすばらしい、何と祝福に満ちている方なのか、神と。同じようにソロモンも詩篇の中でこんなことばを使っています。72：18「**ほむべきかな。神、主、イスラエルの神。ただ、主ひとり、奇しいわざを行なう。**」と、ここでも「**ほむべきかな**」と訳されています。幸いなるかな神、なんとすばらしい祝福に満ちた方なのだろうと。新約聖書の中でも同じようにこのことばが使われています。Iテモテ1：11に「**祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。**」と「**祝福に満ちた神**」とあります。幸いに満ちた神と。パウロは言います、神は幸いに満ちていると。そして、同じようにパウロはこのテモテへの手紙の6：15でこのように言います。「**…神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、**」と。このような考え方、つまり、神に幸いというのが属している、神のものだというのは聖書だけが教えていることではありません。ギリシャの様々な文献を見ると、この「幸い」ということばがギリシャの様々な神々に対して用いられています。なぜそうなのかというと、それらの神々は人間の世界とは無関係であり、それゆえに、貧困や病気、弱さ、不幸、死とは無関係のところにあるから、神々は幸いだということです。つまり、イエスが「幸いなるかな」と言われたとき、あなたは幸福感に満たされていると言ったのではないのです。人々がこのことばを聞いたとき、人々は何を考えたのでしょうか？神がもつ幸い、神にある幸いです。神がもっておられる何一つ支配することができないものがない、不幸と私たちが呼ぶことからかけ離れたところにあるその幸いというものを、彼らは思い描いたのです。それがここでイエスが語られている「幸い」なのです。

(2) 私たちの感情に依存しない：幸いであるという状態は、私が幸せであると感じるかどうかに一切係わりがないのです。むしろ、これは宣告です。イエスはルカの福音書で「幸いなるかな」ということばと同時に「のろわれよ」ということばを使われます。これも宣告です。他の人から見てどうであるのか、私たちがたとえどのような状況にあつても、だれかが「あなたは幸いだ」と言う、たとえ私たちが

幸せだと感じる事がなかったとしても、だれかが私たちを見て言うのです、「幸いだ」と。ここで言われている幸福、祝福というのは、周りの人たちが見て何とすばらしい、うらやましいと思うような、嫉妬の対象となるような位置にその人が置かれていることを表わします。だれが「幸いだ」と言われるのでしょうか？イエスです。イエスがここで八つの祝福をされますが、そこではいくつかの特徴、状態が記されています。それらは私たちが幸いだと言えるものでしょうか？心の貧しい人、悲しんでいる人を幸いだと言えるのでしょうか？でも、幸いだという方がいるのです。それは神です。私たちが悲しんで苦しい状況にあって、もう私はだめだという状態にあって、あなたは幸いだと言われるのは神です。人の幸福というのは、その人が何をもっているか、どのような環境の中にいるか、また、幸福を感じるかどうかには係っているではありません。神との関係にあるのです。聖書は人は神の栄光のために造られたことをはっきり教えています。つまり、人が存在する目的は神の栄光を現わすということであり、そのことをしないで真の幸福を掴むこと、真の満足を得ることはできないのです。それゆえに、神と敵対関係にあるとき人は決して真の幸せを体験することはできないのです。でも逆に、神との関係が正しいものになっているなら、天の御国に国籍をもつ者なら、その人は幸いなのです。たとえこの世のすべての人があなたは不幸だといったとしても…。

ではなぜ、この人たちは幸いだと言われるほどの祝福を得ているのでしょうか。神ご自身が宣言される幸いとはこのテキストの中にあります。皆さんはこの文章、「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。…**」と続く文章を見て、その後半部分をどのように理解されるでしょうか？それぞれの節にあって、…だからです、…からです、ということばが付けられています。これをどのように理解しておられるでしょうか？最も一般的に理解されているのは、心の貧しい者に対して、結果として、または報酬として、後半部分の事柄が与えられていると考えるのが一般的ではないかと思えます。つまり、心の貧しい者は幸いです。なぜなら、その人には天の御国が与えられるからだということです。言い換えれば、この人は幸いである、なぜなら、彼は心が貧しいから天の御国は彼のものになると。しかし、実際にここで語られているのは、それとは全く反対のことです。この後半部分というのは原因を表わしているのです。理由です。なぜ幸いなのかという理由です。そして、これはそのような特徴をもった人に与えられる報酬でも、結果でもないのです。この事実というのは、私たちがこの至福の教えを考えるとときに、その理解を180度変えるものではないかと思えます。イエスがこのような特徴をもって人に対して祝福の宣告をされるのは、彼らが心の貧しさや、悲しみや柔和や義に対する飢え渇きやあわれみ深さをもっているからではないのです。天の御国はその人のものだから、だから幸いだと言っているのです。このような人たちは天に国籍をもつから幸いだと言うのです。実際にここで使われているギリシャ語、…だからです、…からです、は理由、または原因を表わすことばなのです。そして、何よりも興味深いことは、3節と10節、最初と最後の幸いの宣告が同じ後半部分をもっているということです。両方とも「天の御国はその人のものだからです。」とあります。これはユダヤ人的な詩的表現です。最初と最後、サンドイッチにしてその間にあることすべては、この両側の内容なのです。つまり、この至福の教え、なぜあなたは幸いなのか、イエスが幸いだと言われる理由はあなたが天の御国に属する者だからということです。私たちが心が貧しいから、悲しんでいるから柔和だから幸いなものではありません。天の御国に今国籍を持つものだからあなたは幸いだと言うのです。確かに、イエスが言われる特徴はこの世の人から見れば何と幸いな人なのだろうと宣言するようなものではないでしょう。いや、むしろその反対かもしれません。しかし、イエスはこのような特徴をもった人が天の御国に属するがゆえに幸いだと言われるのです。この至福の教えのポイント、天国民の特徴とは何でしょう？それは彼らが天の御国に属するがゆえにもっている幸いです。そのことを私たちがよく分かっていないと、このみことばは意味を失ってゆきます。変わって行きます。ですから、ぜひこのことを覚えていただきたいのです。

### 3. なぜ、この教えが私たちにとって重要なのか？

なぜ、私たちがこのみことばを学んで行かなければいけないのでしょうか。これからそれを学んで行くに当たって、皆さんに考えていただきたいことはたくさんあるのですが、その中でも特に大切なことを二つ紹介します。

(1) 私たちの幸いは私たちの未来において私たちがどこに留まるのかに係っている：これは余りにも当然なことではないかと言われるかもしれませんが、これ以上に重要な真理はありません。天なのかそれともさばきの場であるのか…。この文脈を見てきて私たちが学んだことは、私たちの幸いは私たちが天の御国に属するか属さないかに係っているということです。このメッセージを聞いていた多くの群集たち、とくにパリサイ人や律法学者たちというのは、自分たちこそ天の御国に属すると思っていました。彼らはユダヤ人だから、そして、私はこんなすばらしいわざをしているのだから当然入りますと思っていました。そのような人たちにイエスが語られたこれらのことばというのは、どんな影響を与えたので

しょう？彼らは思いました、天の御国に入るなら自分たちはきっとすばらしい地位に上げられる、この世すべてを治める者になる、メシヤの王国がやって来るなら私たちは今の奴隷の支配から解放されてすべての国民を治める偉大な者へと、神が変えてくださる、私たちの財産は増し加わり地上で繁栄するのだと彼らは考えていました。その者たちにイエスは「幸いなるかな、天の御国に属する人」と、その人は今現在、心の貧しさという特徴をもっているから、悲しんでいるからと。このことはユダヤ人たちが期待していたメッセージではありませんでした。神の御国にあって私たちは完全な喜びと、この人生の充足を経験します。なぜなら、そこに私たちを満たしてくださる唯一の方、神がおられるからです。この王国において私たちはすべての必要が満たされます。完全な満足を得ることができるのです。それゆえに、イエスはこの王国に国籍をもつ者は幸いだと言われるのです。もうそのことが保証されているからです。いつか必ず完全な満足を得、いつか必ず完全な喜びを体験し、何一つ欠けたところのない、涙一つ流すことのない、そのような永遠を送ることができるから、だから幸いだというのです。この3-12節までの至福の教えのすべては、天の御国に入っているがゆえに教えられている特徴です。神との関係をもっていなければ、御国に入っていなければ私たちは決して幸いになることはできないのです。

(2) 神と個人的な関係をもっていること：この部分でイエスはいったいどうすれば天の御国に入るのかを教えているのではありません。そのことは書かれていません。イエスはここで天の御国に属する人がどういう人なのかを教えています。けれども、私たちが今このみことばを学んで行こうとするときに、私たちが聖書の啓示をすべて得ていて、それを理解したその立場から考えようとするなら、私たちはこのように言うことができます。この幸いは神がもっておられる特徴であり、それを私たち人間が得ることができるためには、私たちがこの神の特徴をもつ者にならなければならないと。人間はもともとそれらをもっていないからです。では、どのようにしてそれを得るのでしょうか？それは私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを信じることによるのみ与えられるのです。つまり、この王国の王であるイエス・キリストと個人的な関係を、その信仰のゆえにもっている者でなければ、イエスがここに挙げられている完全な喜び、完全な満足のゆえにもたらされる幸いをもつことはできないのです。Ⅱペテロ1：4にはこのように書かれています。「**その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。**」と、これはイエス・キリストによる救いによってそのようなになるという約束です。だから私たちは幸いを得ることができるのです。神がもっておられる幸いを私たちに対して「あなたはそれをもっている」とイエスは宣告されるのです。

私たち人間は多くのとき幸いを求めて生きようとし、どうすれば幸せになるのかと考えます。私たちに不幸をもたらすと思われるものをすべて避け、幸福をもたらすものすべてを得たとしても、そこにイエスが語っておられるような幸福があるのでしょうか？永遠に継続する本当の満足です。イエスは実に面白いことをルカの福音書の中で言っておられます。「**どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。**」(ルカ12：15)。私を幸せにするというものをいくら集めたとしても、本当に幸せになるためにはイエスのもとに来ることで、天の御国に国籍をもちなさいとイエスは言われます。イエスは私たちに幸福な人がだれなのかを教えておられます。もし、皆さんが幸せになりたいと考えておられるなら、幸せを探しておられるなら、皆さんが来なければならないのはこのイエス・キリストのところ、そして、この方によって天の御国に属するその国籍を手に入れなければならないのです。

皆さんは今日のメッセージのタイトルに困惑されたかもしれません、「幸福に降服する」と。それは皆さんに今日話そうとするメッセージに関心をもっていたからですが、ちゃんと理由があります。もし皆さんがまだイエス・キリストを信じていなければ、しなければいけないことはイエス・キリストを信じることです。そこにしか幸福はないからとイエスは言われるからです。もしイエス・キリストを信じておられるなら、あなたはもうすでに天の御国に国籍をもっておられます。イエスがこの山上の説教で語っておられるその国に国籍があるのです。天国民なのです。もし、これが本当であるとするなら、皆さんは間違いなく幸いな人です。皆さんはもしかすると今日この瞬間でも、私の幸せはどこにあるのだろうと探しておられたかもしれません。皆さんの幸せはもう皆さんの内にあるのです。イエス・キリストによって救われたそのときから、皆さんは幸いな者と変えられたのです。私は今日幸福ではないと言われるかもしれませんが、イエスは幸福だと言われます。皆さんはイエスの言われることを信じますか？それとも自分の考えを信じますか？私たちが他のところに幸せを探している間に、すでに与えられている幸福に対して私はそれを受け入れないと言って、剣を持ち出しこぶしを突き上げ、その幸福を拒んでいる間に、私たちはその幸福を掴むこと、それを理解することを忘れてしまうのです。だから、私たちはもうすでに与えられている幸福に降服しなければいけないのです。あなたが与えてくださっている幸福以上の幸せはありませんと降参するのです。その幸せを得た者がどのような特徴をもつか、

これから学んで行きましょう。忘れないでください。あなたがイエス・キリストを信じているならあなたは幸いな人です。その幸いの実践の中でしっかり実感して生きることができるように主の前にへりくだり続けたいものです。